



豊前市中心市街地案内マップ



八屋祇園 (大富神社神幸祭)

大富神社神幸祭は、天平12年(西暦740年)の藤原原嗣の乱に、大村鈴木谷の豪族が当時上毛郡の擬大領であった紀宇麻呂が従軍し凱旋した際、宇麻呂が武運を神に感謝し、八尋浜に仮殿を建て茅輪神術を動行したのが起源と言われてます。

神幸祭は毎年4月30日、5月1日に行われ、大富神社から八尋浜の御旅所に神幸行列が下りますが、その前日から八屋地区では各町内から神幸行列を迎える山車が出て街を練り歩きます。これが八屋祇園で、宇島駅周辺の八幡町地区からは、華やかな踊り子に乗せた「踊車」が出て鐘や太鼓の音を響かせながら、商店街の中を行き来します。



平池公園

かつて、この一帯には田畑が多く、灌漑用溜池として川をせき止めて作られた平池ですが、市街化が進み、灌漑としての必要性が減ると、これを埋め立て昭和34年に平池公園が作られました。

平池公園は、完成当時から、滑り台やブランコなども設置され、町の憩いの場として、市民に親しまれてきましたが、平池のほりにはたくさんの桜が植えられていたことから、公園になった後も、植栽がすすめられ、桜の名所として親しまれています。



宇島駅

宇島駅は、明治30年(1897年)に豊州鉄道の「宇ノ島駅」として開業しました。豊州鉄道はその後、九州鉄道に吸収され、明治40年には国有化されました。

大正3年には、宇島から大平村宇野までの軽便鉄道が「宇島鉄道」として開業しましたが、山国川を挟んで対岸には中津から守実まで走る耶馬溪鉄道もあり、営業不振などの理由から短命に終わりました。昭和62年に国鉄から事業を引き継いだJR九州が発足、現在は北九州方面への通勤客や、通学の高校生が数多く利用しています。



小今井潤治翁像

上毛郡小祝に生まれ、文政年間に宇島に移住した小今井潤治は、米穀商 万屋亀安助右衛門の養子になると抜群の才覚を発揮し、関西や四国の商人と取引を行ない、豪商と言われるまでになりました。

天保7年には上毛郡のみで通用する「万屋札」の発行。その後大庄屋、御蔵本を申し付けられ、藩の財政に貢献した潤治は、明治以降も宇島港管理経費を一手に負担するなど、地域の発展に尽力しました。仏法に帰依した潤治は、明治2年に本願寺助定方に就任し、本願寺を経済面から支えた他、古表神社の拝殿や光専寺の本堂寄進など、寺社の復興にも私財を投じました。明治12年には、浄土真宗の私立校



「小今井乗桂校」を設置し、多くの師弟を教育しました。現在、乗桂校跡には宇島港方面を望む翁の銅像が建てられています。

にれの杜 (楡神社)

平成17年の、県道拡幅・交差点改良事業の際に、楡神社境内をリニューアルして生まれた多目的施設が「まちなか交流センターにれの杜」です。施設内には、八幡町公民館の建て替えに併せ、多機能トイレと展示室が一体となって整備され、境内はポケットパークとして生まれ変わりました。

名前の由来となった「楡神社」は、宇佐八幡宮とも縁のある神社で、八幡社の横には恵比須社も祀られており、毎年12月に恵比須祭りも行われています。ポケットパークの入口には、市のマスコットキャラクター「くぼてん」のブロンズ像と、一等水準点があります。



まちを歩こう!!

豊前の街並みは、海沿いに続く街道沿いに、自然発生的に生まれました。明治に入り、海上交通が盛んになると、宇島港の周りに宿屋や商店などが立ち並び、賑わいを見せました。

その後、鉄道が敷かれると、宇島駅を中心に市街地ができ、その中に公共施設も建てられました。まちの中で文化も生まれ、安全や防犯も、地域ぐるみで維持されてきました。

買物も、娯楽も、すべてまちが舞台でした。自動車社会の到来で、まちの機能は郊外に拡散し、バラバラになってしまいました。

しかし、いま再び、まちが注目を集めています。子供からお年寄りまで、誰もが安全に、歩いて暮らせるまちは、様々な機能が集まった、自動車に頼らない、環境にも優しい生活空間です。

さあ、みんなでまちに出かけましょう。